

英文要旨

A copy of translation with notes of Chun-qiu Fan-lu ren-yi-fa,ji-yi.

※¹ Tomotsugu SAKAMOTO

※² Miki ZAIKI

It is said that Chun-qiu Fan-lu (春秋繁露) was written by Don Chong-shu (董仲舒) in Han (漢) period. This Paper is a translation, annotation and consideration of Chun-qiu Fan-lu ren-yi-fa (仁義法), ji-yi (祭義).

キーワード

仁 義 祭祀 鬼神

※ 1 高松工業高等専門学校一般教育科

※ 2 比治山大学非常勤講師

『春秋繁露』 訳注稿 仁義法・祭義篇

坂本 具償
財木 美樹

凡例

- 一、本訳注は『春秋繁露』の「仁義法第二十九」「祭義第七十六」に対して訳注を施したものである。
- 二、本訳注は蘇輿の『春秋繁露義證』（宣統二年長沙刊本）を底本とし、原文と【校記】【書き下し文】【注】【現代語訳】から成り、内容によって適当な段落に区切ったものである。
- 三、各篇の冒頭には簡単な要旨を述べて読解の便に供した。
- 四、原文は極力底本の文字を用いるようにしたが、写植文字の制約により、原文とは異なる字体となった文字もある。
- 五、原文を改めた場合は、原本の文字は（ ）で示し、校訂及び増補した文字は「」で示す。その詳細は【校記】で述べる。
- 六、【書き下し文】は校訂・増補した原文に基づいて書き下した。
- 七、【書き下し文】では、脱文の字数が不明の場合は、……で示し、特定できる場合は□を一字として示す。
- 八、【現代語訳】では、補訳は（ ）で示し、補注は「」で示す。
- 九、校記及び注で言及する書名・人物は次の通りである。
 - ① 宋本 宋嘉定四年江右計臺刻本（『北京図書館古籍珍本叢刊』2所収）
 - ② 盧文弨 『春秋繁露』十七卷（『抱經堂叢書』所収）
 - ③ 凌曙 『春秋繁露注』十七卷 嘉慶二十年蜚雲閣凌氏叢書本

仁義法第二十九

前半は、仁は人を愛すること、義は我を正すことという定義を、例を引きながらくり返し論証する。後半は義と仁を比較し、自治と治他の順序が異なることを『論語』を引いて論証し、仁と義の相違をよく議論しなければならぬとする。

春秋之所治、人與我也。所以治人與我者、仁與義也。以仁安人、以義正我。故仁之爲言人也。義之爲言我也。言名以別矣。仁之於人、義之（與）〔於〕①我者、不可不察也。衆人不察、乃反以仁自裕、而以義設人、詭其處而逆其理。鮮不亂矣。是故人莫欲亂、而大抵常亂。凡以聞於人我之分、而不省仁義之所在也。是故春秋爲仁義法。仁之法在愛人、不在愛我。義之法在正我、不在正人。我不自正、雖能正人、弗予爲義。人不被其愛、雖厚自愛、不予爲仁。昔者晉靈公殺膳宰以淑飲食、彈大夫以娛其意。非不厚自愛也。然而不得爲淑人者、不愛人也。質於愛民、以下至於鳥獸昆蟲莫不愛。不愛、奚足謂仁。仁者、愛人之名也。

嵩、傳無大之之辭、自爲追。（公追戎於濟西）②、則善其所恤遠也。兵已加焉、乃往救之、則弗美。未至、豫備之則美之。善其救害之先也。夫救（蚤）〔害〕③而先〔知〕④之、則害無由起、而天下無害矣。然則觀物之動、而先覺其萌、絶亂塞害於將然而未形之時、春秋之志也。其明至矣。非堯舜之智、知禮之本、孰能當此。故救害而先知之、明也。公之所恤遠、而春秋美之。詳其美恤遠之意、則天地之間、然後快其仁矣。非三王之德、選賢之精、孰能如此。是以知

明先、以仁厚遠、遠而愈賢、近而愈不肖者、愛也。故王者愛及四夷、霸者愛及諸侯、安者愛及封內、危者愛及旁側、亡者愛及獨身。獨身者、雖立天子諸侯之位、一夫之人耳、無臣民之用矣。如此者、莫之亡而自亡也。春秋不言伐梁者、而言梁亡、蓋愛獨及其身者也。故曰、仁(者)〔在〕⑤愛人、不在愛我、此其法也。

義云者、非謂正人、謂正我。雖有亂世枉上、莫不欲正人。奚謂義。昔者楚靈王討陳蔡之賊、齊桓公執袁濤塗之罪、非不能正人也。然而春秋弗予、不得爲義者、我不正也。闔廬能正楚蔡之難矣、而春秋奪之義辭、以其身不正也。

潞子之於諸侯、無所能正、春秋予之有義、其身正也。(趨而利也)⑥故曰、義在正我、不在正人、此其法也。夫我無之〔而〕⑦求諸人、我有之而〔非〕〔非〕

⑧諸人。人之所不能受也。其理逆矣。何可謂義。義者、謂宜在我者。宜在我者、而後可以稱義。故言義者、合我與宜、以爲一言。以此操之、義之爲言我也。故曰、有爲而得義者、謂之自得。有爲而失義者、謂之自失。人好義者、謂之自好。人不好義者、謂之不自好。以此參之、義〔在正〕⑨我也、明矣。

是義與仁殊。仁謂往、義謂來。仁大遠、義大近。愛在人、謂之仁、(義)〔宜〕⑩在我、謂之義。仁主人、義主我也。故曰、仁者人也、義者我也、此之謂也。

君子求仁義之別、以紀人我之間、然後辨乎內外之分、而著於順逆之處也。是故內治反理以正身、據禮以勸福。外治推恩以廣施、寬制以容衆。孔子謂冉子曰、治民者、先富之而後加教。語樊遲曰、治身者、先難後獲。以此之謂、治身之與治民、所先後者不同焉矣。詩曰、飲之食之、教之誨之。先飲食而後教誨、謂治人也。又曰、坎坎伐輻、彼君子兮、不素餐兮。先其事後其食、謂治身也。

春秋刺上之過、而矜下之苦。小惡在外弗舉、在我書而〔誅〕〔非〕⑪之。凡此(六)⑫者、以仁治人、義治我。躬自厚而薄責於外、此之謂也。且論已見之、而人不察。曰、君子攻其惡、不攻人之惡。不攻人之惡、非仁之寬(與)〔歟〕⑬。自攻其惡、非義之全(與)〔歟〕⑭。此謂之仁造人、義造我。何以異乎。故自稱其惡、謂之情、稱人之惡、謂之賊、求諸己、謂之厚、求諸人、謂之薄、

自責以備、謂之明、責人以備、謂之惑。是故以自治之節治人、是居上不寬也。以治人之度自治、是爲禮不敬也。爲禮不敬、則傷行而民弗尊。居上不寬、則傷厚而民弗親。弗親則弗信、弗尊則弗敬。二端之政、詭於上而僻行之、則誹於下。仁義之處、可無論乎。夫目不視弗見、心弗論不得。雖有天下之至味、弗嚼弗知其旨也。雖有聖人之至道、弗論不知其義也。

【校記】

- ① 「與」 宋本に從い、「於」に改める。
- ② 盧文弨に從い、「公追戎於濟西」の六字を補う。
- ③ 「蚤」 蘇輿・惠棟〔校釋〕引・陶鴻慶に從い、「害」に改める。
- ④ 陶鴻慶に從い、「知」字を補う。
- ⑤ 「者」 前文の「仁之法在愛人、不在愛我」、後文の「義在正我、不在正人」に從い、「在」に改める。
- ⑥ 「趨而利也」 盧文弨に從い、削除する。
- ⑦ 『黃氏日鈔』に從い、「而」字を補う。
- ⑧ 「誅」 宋本注・『黃氏日鈔』に從い、「非」に改める。
- ⑨ 陶鴻慶に從い、「在正」の二字を補う。
- ⑩ 「義」 蘇輿・劉師培・陶鴻慶に從い、「宜」に改める。
- ⑪ 「誅」 宋本注・『黃氏日鈔』に從い、「非」に改める。
- ⑫ 「六」 俞樾が「並びに六者無ければ、則ち此の六字は衍文と爲す」に從い、削除する。
- ⑬ 「與」 宋本に從い、「歟」に改める。

【書き下し文】

仁義法第二十九①

『春秋』の治むる所は、人と我なり。人と我を治むる所以の者は、仁と義なり。仁を以て人を安んじ、義を以て我を正す②。故に仁の言爲るや人なり。義の言爲るや我なり。名を言ひて以て別つ。仁の人に於ける、義の我に於ける者は、察せざる可からざるなり。衆人察せず、乃ち反て仁を以て自ら裕くし、義を以て人を設け、其の處を詭りて其の理を逆にす。亂れざることを鮮し。是の故に人、亂れんと欲すること莫くして、大抵常に亂る。凡そ以て人我の分に闇くして、仁義の在る所を省せざればなり。是の故に『春秋』は仁義の法を爲す。仁の法は人を愛するに在りて、我を愛するに在らず③。義の法は我を正すに在りて、人を正すに在らず④。我自ら正さざれば、能く人を正すと雖も、義と爲すを予さず。人、其の愛を被らざれば、厚く自ら愛すと雖も、仁と爲すを予さず。昔、晉の靈公、膳宰を殺して以て飲食を溲くし、大夫を彈ちて以て其の意を娛しましむ⑤。厚く自ら愛せざるに非ざるなり。然り而して淑人と爲すを得ざる者は、人を愛せざればなり。民を愛するに質にして、以て下、鳥獸昆蟲に至るまで愛せざる莫し。愛せざれば、奚ぞ仁と謂ふに足らん。仁とは、人を愛するの名なり⑥。

嵩⑦には、傳に「之を大にする」の辭無し。自ら追を爲せばなり。公、戎を濟西に追ふ⑧は、則ち其の恤ふる所遠きを善みするなり。兵已に焉に加へられ、乃ち往きて之を救ふは、則ち美とせず。未だ至らざるに、豫め之に備ふるは、則ち之を美とす。其の害の先を救ふを善みするなり。夫れ害を救ひて先に之を知れば、則ち害は由りて起る無くして、天下害無し。然らば則ち物の動くを觀、先づ其の萌すを覺り、亂を絶ち害を將然にして未だ形はれざるの時に塞ぐは、『春秋』の志なり⑨。其の明至れり。堯舜の智にして、禮の本を知るに非ざれば、孰か能く此に當らん。故に害を救ひて先に之を知るは明なり。公の恤ふる所遠くして、『春秋』之を美とす。其の恤ふること遠きを美とするの意を詳らかにすれば、則ち天地の間、然る後に其の仁を快くす。三王の徳もて、賢の精を選ぶに非ざれば、孰か能く此の如くならん。是れ知を以て先を明らかにし、仁を以て遠きを厚くす。遠くして愈いよ賢、近くし

て愈いよ不肖なるは、愛なり。故に王者は、愛、四夷に及び、霸者は、愛、諸侯に及び、安者は、愛、封内に及び、危者は、愛、旁側に及び、亡者は、愛、獨身に及ぶ。獨身なる者は、天子諸侯の位に立つと雖も、一夫の人のみ、臣民の用無し。此の如き者は、之を亡ぼす莫くして自ら亡ぶるなり。『春秋』「梁を伐つ」と言はずして、「梁亡ぶ」⑩と言ふは、蓋し愛獨り其の身に及ぶ者ならん。故に「仁者は人を愛するに在り、我を愛するに在らず」と曰ふは、此れ其の法なり。

義と云ふ者は、人を正すを謂ふに非ず、我を正すを謂ふ。亂世枉上有りと雖も、人を正さんと欲せざる莫し。奚をか義と謂ふ。昔、楚の靈王、陳蔡の賊を討ち⑪、齊の桓公、袁濤塗の罪を執ふる⑫は、人を正す能はざるに非ざるなり。然り而して『春秋』は予さず、義を爲すを得ざる者は、我正しからざればなり。闔廬能く楚蔡の難を正す⑬も、『春秋』は之が義辭を奪ふ、其の身正しからざるを以てなり。潞子の、諸侯に於けるや⑭、能く正す所無し、『春秋』之に予ふるに義を有てす。其の身正しければなり。故に「義は我を正すに在り、人を正すに在らず」と曰ふは、此れ其の法なり。夫れ我れ之れ無くして諸人に求め、我れ之れ有りて諸人に非るは、人の受くる能はざる所なり。其の理逆けり。何ぞ義と謂ふ可けん。義とは、宜、我に在る者を謂ふ。宜、我に在る者にして、而る後に以て義と稱す可し⑮。故に義と言ふ者は、我と宜とを合して以て一言と爲す。此を以て之を操すれば、義の言爲る我なり。故に曰く、爲す有りて義を得る者、之を自得と謂ふ。爲す有りて義を失ふ者、之を自失と謂ふ。人、義を好む者、之を自好と謂ふ。人、義を好まざる者、之を不自好と謂ふ。此を以て之を參すれば、義は我を正すに在るや、明らかなり。

是れ義と仁は殊なる。仁は往を謂ひ、義は來を謂ふ⑯。仁は大だ遠く、義は大だ近し。愛、人に在り、之を仁と謂ひ、宜、我に在り、之を義と謂ふ。仁は人を主とし、義は我を主とするなり。故に「仁は人なり、義は我なり」と曰ふは、此を之れ謂ふなり。君子、仁義の別を求めて、以て人我の間を紀

し、然る後に内外の分を辨じ、順逆の處を著らかにするなり。是の故に内治は理に反りて以て身を正し、禮に據りて以て福を勸く。外治は恩を推して以て廣く施し、制を寛くして以て衆を容る。孔子、冉子に謂ひて曰く、「民を治むる者は、先づ之を富ませて而る後に教を加ふ」①と。樊遲に語りて曰く、「身を治むる者は、難きを先にし獲るを後にす」②と。此の謂を以てすれば、身を治むると民を治むると、先後する所の者同じからず。『詩』に「之に飲ましめ之に食はしめ、之に教へ之に誨ふ」と曰ふ③は、飲食を先にし教誨を後にし、人を治むるを謂ふなり。又「坎坎として輻を伐る、彼の君子は、素餐せず」と曰ふ④は、其の事を先にし其の食を後にす、身を治むるを謂ふなり。

『春秋』は上の過ちを刺り、下の苦しみを矜む。小惡、外に在りては擧げず、我に在りては書して之を非る⑤。凡そ此の六者は、仁を以て人を治め、義もて我を治む。「躬自ら厚くして薄く外を責む」⑥とは、此を之れ謂ふなり。

且つ『論』に已に之を見るも、人察せず。曰く、「君子は其の惡を攻め、人の惡を攻めず」⑦と。人の惡を攻めざるは、仁の寛に非ずや。自ら其の惡を攻むるは、義の全きに非ずや。此れ之を仁は人に造り、義は我に造ると謂ふ。何を以て異ならんや。故に自ら其の惡を稱す、之を情と謂ふ⑧。人の惡を稱す、之を賊と謂ふ。諸を己に求む、之を厚と謂ふ。諸を人に求む、之を薄と謂ふ。自ら責めて以て備ふ、之を明と謂ふ。人を責めて以て備ふ、之を惑と謂ふ⑨。是の故に自ら治むるの節を以て人を治むるは、是れ上に居りて寛ならざるなり。人を治むるの度を以て自ら治むるは、是れ禮を爲すも敬はざるなり⑩。禮を爲すも敬はざれば、則ち行ひを傷つけて民尊ばず。上に居りて寛ならざれば、則ち厚を傷つけて民親しまず。親しまざれば則ち信じられず、尊ばざれば則ち敬はれず。二端の政、上に詭へ、之を僻行すれば則ち下に誹らる。仁義の處は、論無かる可けんや。夫れ目は視ざれば見へず、心は論ぜざれば得ず。天下の至味有りと雖も、嚼せざれば其の旨さを知らざるなり。聖人の至道有りと雖も、論ぜざれば其の義を知らざるなり⑪。

【注】

① 蘇輿は、『莊子』天地「天道」篇に『孔子往きて老聃を見、十二經を繙きて以て説く。老聃曰く、願はくは其の要を聞かん。孔子曰く、要は仁義に在り』とあり。按ずるに、『禮記』表記に子を引きて『仁は天下の表なり。義は天下の制なり』と言ふ。又『人に數有り、義に短長小大有り』と云ふ。『易』繫辭「説卦」に『人の道を立つ、曰く仁と義と』と云ふ。『韓非子』外儲説右に『子路曰く、夫子に學ぶ所の者は仁義なり』といふ。而るに『論語』中に仁義兼ね言ふ者無し。『孟子』仁を言ふに、始めて多く義を以て配す。『賈子』道術篇に『心に人を愛するを兼ね、之を仁と謂ひ、人に反るを戻と爲す。行ひ其の宜に充つ、之を義と謂ひ、義に反るを悞と爲す』といふも、亦仁義を以て分晰し、韓愈『原道』の祖とする所と爲す。此の篇云ふ所は厚躬薄責の旨に本づき、且つ三たび『論語』を引きて以て證し、孔子の法を明らかにするなり。他篇は、『春秋』の要旨は仁に在りと言ふ。此は施政者、人を治むるに偏りて、自ら治むるを知らざるを恐るるが故に其の法を著らかにす』という。

② 蘇輿は、『漢書』杜欽傳の對策の、

王者は天地に法り、仁に非ざれば以て廣く施す無く、義に非ざれば以て身を正す無し。己に克ちて義を就し、恕以て人に及ぼすは、六經の上ぶ所なり。（王者法天地、非仁無以廣施、非義無以正身、克己就義、恕以及人、六經之所上也）

宋の蘇軾の、

『春秋』の義は、法を立つるには嚴を貴び、人を責むるには寛を貴ぶ。

（春秋之義、立法貴嚴、責人貴寬）

を引き、「並びに此と合す」という。

③ 人を愛することを仁とするのは常訓で、諸書に散見する。

仁者人也。『中庸』

仁者愛人也。〔『孟子』離婁〕

仁也者人也。〔『孟子』盡心上〕

言仁必及人。〔『國語』周語〕

愛人能仁。〔『國語』周語〕

愛由情出、謂之仁。〔『韓詩外傳』〕

④ 蘇輿は、『莊子』則陽篇の、

柏矩曰く、古の人に君たる者は、得を以て民に在ると爲し、失を以て己に在ると爲し、正を以て民に在ると爲し、枉を以て己に在ると爲す。

〔柏矩曰、古之君人者、以得爲在民、以失爲在己、以正爲在民、以枉爲在己〕

を引き、「亦此の義なり」という。

⑤ 宣公六年『公羊傳』に、

靈公、無道を爲す。諸侯大夫をして皆内朝せしむ。然る後に臺上に處りて、彈を引きて之を彈つ。己に趨りて丸を辟く。是れ樂しむのみ。

趙盾己に朝して出で、諸大夫と朝に立つ。人畜を荷ひて闈より出づる者有り。趙盾曰く、彼れは何ぞや。夫れ畜曷爲れぞ闈より出づ。之を呼ぶも至らず。曰く、子は大夫なり。之を視んと欲すれば、則ち就きて之を視ん。趙盾就きて之を視れば、則ち赫然として死人なり。趙盾曰く、是れ何ぞや。曰く、膳宰なり。熊蹯熟せず。公怒りて斗撃を以て之を殺し、支解して將に我をして之を棄てしめんとす。〔靈公爲無道。使諸侯大夫皆内朝。然後處乎臺上、引彈而彈之。己趨而辟丸。是樂而已矣。趙盾己朝而出與諸大夫立於朝。有人荷畜自闈而出者。趙盾曰、彼何也。夫畜曷爲出闈。呼之不至。曰、子大夫也。欲視之、則就而視之。趙盾就而視之、則赫然死人也。趙盾曰、是何也。曰、膳宰也。熊蹯不熟。公怒以斗擊而殺之、支解將使我棄之〕

とある。

⑥ 蘇輿は、「實は實なり。言ふところは、心を實にして民を愛し、庶物も遺

さず。蓋し聖人の仁は博し。自ら愛するに始まり、人を愛するに推し、物を愛するに極まる。此れ『春秋』の志なり」という。

⑦ 崑については、僖公二十六年經に、

齊人、我が西鄙を侵す。公、齊の師を追ひて崑に至る。及ばず。〔齊人侵我西鄙。公追齊師至崑。弗及〕

とあるのを指す。その『公羊傳』には、

其の崑に至る、及ばずと言ふは何ぞや。侈なり。〔其言至崑弗及何。侈也〕

とある。齊の軍が魯の国境に侵入してから、僖公が齊の軍を崑まで追い払った。軍が侵入してから救いに行つたから、傳に「之を大にする」という言葉がないのである。

⑧ 「濟西」は、莊公十八年經の「夏、公追戎于濟西」を指す。その『公羊傳』には、

此れ未だ伐と言ふ者有らず。其の追と言ふは何ぞや。其の中國の爲に追ふを大とするなり。此れ未だ中國を伐つ者有らざれば、則ち其の中國の爲に追ふと言ふは何ぞや。其の未だ至らずして豫め之を禦ぐを大とするなり。其の濟西にと言ふは何ぞや。之を大とすればなり。〔此未有言伐者。其言追何。大其爲中國追也。此未有伐中國者、則其言爲中國追何。大其未至而豫禦之也。其言于濟西何。大之也〕

とあり、軍が自分の領土に侵入する前に追い払つたから、傳に「之を大にする」と書いたのである。

⑨ 蘇輿は、『荀子』大略篇の、

天子即位するに、中卿進みて曰く、「天に配びて下土を有する者は、事に先んじて事を慮るは、之を接と謂ひ、接なれば則ち事は優成せん。

患に先んじて患を慮るは、之を豫と謂ひ、豫なれば則ち禍は生ぜず。事至りて而る後に慮る者は、之を後と謂ひ、後なれば則ち事は擧はれず。患至りて而る後に慮る者は、之を困と謂ひ、困なれば則ち禍は禦

ぐ可からず」。天子に二策を授く。(天子即位、中卿進曰、配天而有下土者、先事慮事、謂之接、接則事優成。先患慮患、謂之豫、豫則禍不生。事至而後慮者、謂之後、後則事不舉。患至而後慮者、謂之困、困則禍不可禦。授天子二策)

と、『白虎通』諫諍篇の、

諷諫は智なり。禍患の萌すを知り、深く其の事の未だ彰あはれざるを暗みて諷告す。此れ智の性なり。(諷諫者智也。知禍患之萌、深睹其事未彰而諷告焉。此智之性也)

を引く。

⑩ 「梁」は春秋の時の国名である。僖公十九年經に、「梁亡」とあるのを指す。その『公羊傳』に、

此れ未だ伐つ者有らず、其の梁亡ぶと言ふは何ぞや。自ら亡ぶるなり。其の自ら亡ぶるは奈何。魚爛くりて亡ぶるなり。(此未有伐者、其言梁亡何。自亡也。其自亡奈何。魚爛而亡也)

とあり、『穀梁傳』にも、

自ら亡ぶるなり。酒に涵し、色に淫し、心昏み、耳目塞ぐ。上に正長の治無く、大臣背叛し、民寇盜を爲す。梁亡ぶるは、自ら亡ぶるなり。如し力役を加へらるれば、涵は道ふに足らざるなり。梁亡ぶ、鄭、其の師を棄つるは、我れ加損無し、名を正すのみ。梁亡ぶは、惡正を出すなり。鄭、其の師を棄つるは、其の長を惡にくむなり。(自亡也。涵於酒、淫於色。心昏、耳目塞。上無正長之治、大臣背叛、民爲寇盜。梁亡、自亡也。如加力役焉、涵不足道也。梁亡、鄭棄其師、我無加損焉、正名而已矣。梁亡、出惡正也。鄭棄其師、惡其長也)

とある。梁が亡んだのは梁自身に原因があるのであり、伐たれたからといって「伐」と書かなかつたのである。

⑪ 「陳の賊を討つ」は、昭公八年經の「冬、十月壬午、楚師滅陳。執陳公子招、放之于越」を指す。「蔡の賊を討つ」は、昭公十年經の「夏、四月丁

巳、楚子虔誘蔡侯般、殺之于申」を指す。その『公羊傳』に、

楚子虔何を以て名いふ。絶すればなり。曷爲れぞ之を絶す。其の誘ひて討つが爲なり。此れ賊を討つなり。之を誘ふと雖も、則ち曷爲れぞ之を絶つ。惡を懷きて不義を討つは、君子は予さざるなり。(楚子虔何以名。絶。曷爲絶之。爲其誘討也。此討賊也。雖誘之、則曷爲絶之。懷惡而討不義、君子不予也)

とある。

⑫ 僖公四年經の「齊人執陳袁濇塗」を指す。その『公羊傳』に、

濇塗の罪は何ぞや。軍の道を辟よくるなり。其の軍の道を辟くるは奈何。濇塗、桓公に謂ひて曰く、君既に南夷を服す。何ぞ師を還して海に濱して東し、東夷を服し、且つ歸らざる。桓公曰く、諾。是に於て師を還し、海に濱して東し、大いに沛澤の中に陥る。顧みて濇塗を執ふ。執いふに曷爲れぞ或いは侯と稱し、或いは人と稱す。侯と稱して執いふは、伯討なり。人と稱して執いふは、伯討に非ざるなり。此れ有罪を執ふ。何を以て伯討と爲すを得ざる。古は、周公東征すれば則ち西國怨み、西征すれば則ち東國怨む。桓公塗みちを陳に假かりて楚を伐つも、則ち陳人其の反るに己に由るを欲せざるは、師正しからざるが故なり。其の師を脩めずして濇塗を執とむ。古人の討は、則ち然らず。(濇塗之罪何。辟軍之道也。其辟軍之道奈何。濇塗謂桓公曰、君既服南夷矣。何不還師濱海而東、服東夷、且歸。桓公曰、諾。於是還師、濱海而東、大陷于沛澤之中。顧而執濇塗。執者曷爲或稱侯、或稱人。稱侯而執者、伯討也。稱人而執者、非伯討也。此執有罪、何以不得爲伯討。古者、周公東征則西國怨、西征則東國怨。桓公假塗于陳而伐楚、則陳人不欲其反由己者、師不正故也。不脩其師而執濇塗。古人之討、則不然也)

とある。

⑬ 定公四年、楚が蔡を伐つたので、蔡の昭侯は呉に救援を求めた。呉の闔廬は蔡のために兵を起し、楚を伯舉に破つたことを指す。

⑭ 宣公十五年經の「六月癸卯、晉師滅赤狄潞氏、以潞子嬰兒歸」を指す。その『公羊傳』には、

潞何を以て子と稱す。潞子の善を爲すや、躬以て亡ぶるに足るのみ。然りと雖も、君子は記せざる可からざるなり。夷狄を離るるも未だ中國に合する能はず。晉師之を伐ち、中國救はず、狄人有せず。是を以て亡ぶるなり。(潞何以稱子。潞子之爲善也、躬足以亡爾。雖然、君子不可不記也。離于夷狄、而未能合于中國。晉師伐之、中國不救、狄人不可不記也。是以亡也)

⑮ 蘇輿は、『禮記』中庸の、
義は宜なり。(義者宜也)

射義の、
義とは此を宜しくする者なり。(義者宜此者也)

を引いて、「義に事を制するの宜有り、身を治むるの宜有り。『孟子』は仁を以て親に親しむと爲し、義を長を敬ふ・君に急なり・兄に従ふと爲す(董は則ち並びに仁に歸す)。又、其の有するに非ずして之を取るは義に非ずと云ふは、此れ事を制するの宜なり。其の差惡の端を以て義と爲さば、則ち心を治むるの宜は身を治むる所以なり。書傳説く所は多く制事を主とし、宋儒は之に本づく。然れども朱子、『孟子』に注して『義は心の制・事の宜なり』と云ふは、二義を兼ね用ふるに似たり。其の實心を治めて宜を得、而る後に以て事を制す可し。理未だ嘗て通ぜずんばあらざるなり。董は専ら其の本を言ふ」という。

⑯ 蘇輿は、「諸を外に施す、故に往と曰ふ。諸を己に責む、故に來と曰ふ。仁往き義來るは又十指篇に見ゆ」といい、『管子』小稱篇の、

明王は往きて民を喜ばしめ、來りて身を懼れしむ。桀紂は往きて民を怒らしめ、來りて身を驕らしむ。(明王往喜民、來懼身。桀紂往怒民、來驕身)

を引き、「正に此の『來』『往』と、義同じ」という。十指篇には、

此を統べて之を擧ぐれば、仁往きて義來り、德澤廣大にして、四海に衍溢し、陰陽和調し、萬物、其の理を得ざる靡し。(統此而擧之、仁往而義來、德澤廣大、衍溢於四海、陰陽和調、萬物靡不得其理矣)

⑰ 孔子が冉有に語った語は『論語』子路篇に見える。

子、衛に適く。冉有僕たり。子曰く、庶きかな。冉有曰く、既に庶し。又何をか加へん。曰く、之を富さん。曰く、既に富めり。又何をか加へん。曰く、之を教へん。(子適衛。冉有僕。子曰、庶矣哉。冉有曰、既庶矣。又何加焉。曰、富之。曰、既富矣。又何加焉。曰、教之)

⑱ 孔子が樊遲に答えた語は『論語』雍也篇に見える。

樊遲、知を問ふ。子曰く、民の義を務め、鬼神を敬して之を遠ざく、知と謂ふ可し。仁を問ふ。曰く、仁者は難きを先にして獲るを後にす、仁と謂ふ可し。(樊遲問知。子曰、務民之義、敬鬼神而遠之。可謂知矣。問仁。曰、仁者、先難而後獲。可謂仁矣)

⑲ 『詩』は『詩經』小雅・縣蠻に見える。蘇輿は、大略篇の、

富まざれば以て民の情を養ふこと無く、教へざれば以て民の性を理むること無し。故に家ごとに五畝の宅と百畝の田にして、其の時を奪ふこと勿きは、之を富ます所以なり。大學を立て、庠序を設け、六禮を修め、十教を明らかにするは、之を道く所以なり。『詩』に、「之に飲ましめ之に食はしめ、之に教へ之に誨ふ」と云ふ。王事具はれり。(不富無以養民情、不教無以理民性。故家五畝宅、百畝田、勿奪其時、所以富之也。立大學、設庠序、修六禮、明十教、所以道之也。詩云、飲之食之、教之誨之。王事具矣)

を引き、「此に『詩』を引きて以て、富を先にし教へを後にするを證す、義、『荀』と同じ」という。

⑳ 『詩』は『詩經』魏風・伐檀に見える。

⑳ 隱公十年『公羊傳』に、

春秋は内を録して外を略にす。外に於ては大悪は書し、小悪は書せず。内に於ては大悪は諱み、小悪は書す。(春秋録内而略外。於外大悪書、小悪不書。於内大悪諱、小悪書)

とあり、その何休注に「内に於ては大悪は諱む、外に於ては大悪は書すとあり、王者起てば當に先づ自ら正すべくして、然る後に乃ち諸夏の大悪を治む可きを明らかにす。内の小悪は書す、外の小悪は書せずとは、内に小悪有らば、適^{あた}たま諸夏の大悪を治む可く、未だ諸夏の小悪を治む可からず。當に先づ自ら正し、然る後に人を正すべきを明らかにす」という。

㉑ 『論語』衛靈公篇に、

子曰く、躬自ら厚くして、薄く人を責むれば、則ち怨みに遠ざかる。(子曰、躬自厚而薄責於人、則遠怨矣)とある。

㉒ 「論」について、蘇輿は、『論』とは『論語』を言ふ。張禹、魯論・齊論を合せ考えて、張侯論と號す。何晏、『論語集解』に序して、古論・新論と稱す。是れ『論語』を但だ『論』と稱するなり」という。『論語』顔淵篇に、

樊遲從ひて舞雩の下に遊ぶ。曰く、敢て徳を崇くし、慝を脩め、惑ひを辨せんことを問ふ。子曰く、善いかな問ふこと。事を先にして得ることを後にするは、徳を崇くするに非ずや。其の悪を攻めて、人の悪を攻むること無きは、慝を脩むるに非ずや。一朝の忿^{いかり}りに其の身を忘れて以て其の親に及ぼすは、惑いに非ずや。(樊遲從遊於舞雩之下。曰、敢問崇徳、脩慝、辨惑。子曰、善哉問。先事後得、非崇徳與。攻其惡、無攻人之惡、非脩慝與、一朝之忿、忘其身以及其親、非惑與)とある。

㉓ 蘇輿は、「情は猶ほ實のごときなり。宣公十五年『公羊傳』の『是れ何ぞ子の情ならんや』(是何子之情也)、『墨子』非攻篇の『情、其の不義なるを

知らざるなり。故に其の言を書して以て後世に遺す』(情不知其不義也。故書其言以遺後世)は『實、其の不義なるを知らざるなり』を謂ふ。『莊子』天道篇の『此れ仁義の情なり』(此仁義之情也)は『此れ仁義の實なり』を謂ふ。『荀子』法行篇に『瑕適並びに見はるは情なり』(瑕適並見、情也)といふ。並びに此と義同じ」という。

㉔ 『呂氏春秋』舉難篇に、

故に君子は人を責むるには則ち仁を以てし、自ら責むるには則ち義を以てす。人を責むるに仁を以てすれば則ち足り易く、足り易ければ則ち人を得。自ら責むるに義を以てすれば則ち非を爲し難し、非を爲し難ければ則ち行ひ飾^たし。故に天地に任じて餘り有り。不肖者は則ち然らず。人を責むるには則ち義を以てし、自ら責むるには則ち仁を以てす。人を責むるに義を以てすれば則ち贍^たり難し、贍^たり難ければ則ち親を失ふ。自ら責むるに仁を以てすれば則ち爲し易し、爲し易ければ則ち行ひ苟なり。故に天下の大なるも容れざるなり。身は危ふきを取り、國は亡を取る。此れ桀・紂・幽・厲の行ひなり。(故君子責人則以人〔仁〕、自責則以義。責人以人〔仁〕則易足、易足則得人。自責以義則難爲非、難爲非則行飾。故任天地而有餘。不肖者則不然。責人則以義、自責則以人〔仁〕。責人以義則難贍、難贍則失親。自責以人〔仁〕則易爲、易爲則行苟。故天下之大而不容也。身取危、國取亡焉。此桀、紂、幽、厲之行也)とある。

㉕ 『論語』八佾篇に、

子曰く、上に居りて寛ならず、禮を爲して敬せず、喪に臨みて哀しまずんば、吾何を以て之を觀んや。(子曰、居上不寛、爲禮不敬、臨喪不哀、吾何以觀之哉)とある。

㉖ 『韓詩外傳』に、

旨酒嘉穀有りと雖も、嘗なめざれば其の旨きを知らず。善道有りと雖も、學ばざれば其の功に達せず。故に學んで然る後に足らざるを知り、教へて然る後に究めざるを知る。(雖有旨酒嘉穀、不嘗不知其旨。雖有善道、不學不達其功。故學然後知不足、教然後知不究)

とあり、『禮記』學記篇にもほぼ同文が見える。

【現代語訳】

仁義法第二十九

『春秋』が治めるものは、人(他人)と我(自分)である。人と我を治めるものは、仁と義である。『春秋』は仁で人を安んじ、義で我を正す。だから仁の意味は人であり、義の意味は我である。文字として書きあらわすことにより区別できる。仁と人の関係、義と我の関係はよくみきわめなければならない。しかし人々はこのことをよくみきわめず、かえって仁で自分を甘やかす、義で人を束縛し、(仁義を)施す対象を取り違え、(仁義の)道理にさからう。そうであれば乱れないことは少ない。だから人は乱れようとしなくてもたいてい乱れる。これはそもそも人と我の(意味の)相違に暗く、仁と義のあるところをみきわめていないからである。それゆえに『春秋』は仁義の法を作ったのである。仁の法は人を愛することにあり、我を愛することにはない。義の法は我を正すことにあり、人を正すことにはない。我を正さなければ、たとえ人を正すことができたとしても、義であるとは認めない。人が愛をこうむらなければ、自分をいくら厚く愛したとしても、仁であるとは認めないのである。(たとえば)その昔、晋の靈公は料理人を殺してうまい食事を食べられるようにし、大夫を弓で射って楽しんだ。彼は自分を厚く愛さなかったのではない。しかし善人とみなされなかったのは、人を愛さなかったからである。真剣に人民を愛し、鳥獸や昆虫にいたるまで愛さないものはない。愛さなければどうして仁ということができようか。仁とは人を愛す

ることの名称なのである。

嵩の伝には「之を大にする」という言葉がない。これは公みづから追撃したからである。公が戎を済の西に追撃した場合は、『春秋』は深慮遠謀であることを褒めた。敵が攻撃してきてからはじめて救出に向かう場合(嵩の場合)は、『春秋』は褒めない。(敵が)まだやってきていないのに、あらかじめそれに備えて準備する場合(済西の場合)は、『春秋』は褒める。害がおこる前に救うのを褒めたのである。そもそも害を救うのに、あらかじめそのことを知っていれば、害がおこる原因はなくなり、天下に害はなくなる。それならば物が動くのをみて、まっさきにその予兆を感知し、乱を断ち、起ろうとするがまだ形としてあらわれる前に害を防ぐのが『春秋』の志である。なんと聡明であることか。堯舜の智を備えていて、礼の本質を知っているものでなければ、だれがこんなことができようか。だから害を救うのに、あらかじめそれを知るのは叡智である。公が深慮遠謀することを、『春秋』は褒める。深慮遠謀する意図を詳らかにすれば、天地の間に仁が急速に広まる。三王の徳をそなえるものが、賢者のすぐれたものを選抜するのでなければ、だれがこんなことができようか。これは知恵で未来のことを明らかにし、仁で遠方の人を厚くもてなすことである。遠くにおよぼすことができるものほど賢者であり、近くにしかおよぼせないものほど不肖であることは、愛によ(って決ま)る。だから王者は愛が四方の夷狄におよび、覇者は愛が諸侯におよび、国を安定するものは愛が自分の国内におよび、国を危うくする者は、愛が自分の近くにいるものだけにおよばず、国を亡ぼす者は、愛が自分の位に立ったとしても、ひとりの男子にすぎず、家臣や人民の信用をうることできない。このようなものは他人が亡ぼそうとしなくても自分から亡んでゆくのである。『春秋』は「梁を伐つ」と言わずに、「梁亡ぶ」と言うが、(この梁君は)おそらく愛が自分だけにしかおよばなかったものなのであろう。だから「仁は人を愛することにあり、我を愛することにはない」というのが、

その方法である。

義とは人を正すことをいうのではなく、我を正すことをいうのである。乱世で暴君がいるからといって、人を正そうとしないものはいない。どういふものを義というのか。その昔、楚の靈王が陳蔡の賊を討伐したこと、齊の桓公が袁濤塗を執えたことは、人を正すことができなかつたわけではない。しかし『春秋』が（彼らの行為を）許さず、義を行ったと認めないのは、我を正すことができなかつたからである。闔廬は楚蔡の争いを收拾したが、『春秋』は義という字を使わなかつた。これは闔廬自身の身が正しくなかつたからである。潞子は諸侯を正すことができたわけではない。それなのに『春秋』は義であると認めた。これは潞子自身の身が正しかったからである。だから「義は我を正すことにあり、人を正すことにはない」というのが、その方法である。そもそも自分もつていないことを人に要求し、自分もつていないからといって（もつていない）人を非難するのは、人が受け入れられることではない。これは道理にそむいていることである。どうして義とすることができようか。義とは宜（事宜）にかなつた行動をとれる能力）が自分にそなわっているものをいう。宜が自分にそなわつたものであつて、はじめて義といふことができる。だから義は「我」と「宜」をあわせてひと文字としているのである。以上のことから理解すると、義の意味は我である。だから次のようにいえよう。行為が義に合致するものを「自得」といふ。行為が義に合致しないものを「自失」といふ。義を好む人を「自好」といふ。義を好まない人を「不自好」といふ。以上のことから考えると、義が我を正すことにあるのは明らかである。

義と仁は異なる。仁は（人にむかつて）往くことをいい、義は（我にむかつて）来ることをいう。仁（がおよぼすところ）はとても遠く、義（がおよぼすところ）はとても近い。愛が人におよぶことを仁といい、宜が我におよぶことを義という。仁は人に対することが主であり、義は我に對することが主である。だから「仁は人であり、義は我である」というのはこの意味であ

る。君子は仁と義の違いを追求して、他人と自分の関係を調節する。それから（自分の）内と外の区別を弁別し、順と逆の違いを明らかにする。そこで自分を治める場合は、道理にたちかえつて身を正し、礼にのつとつて福をもたらす。他人を治める場合は、恩沢を広く施し、規制をゆるくして大衆を受け入れる。孔子は冉有に對して、「民を治めるものはまず民をゆたかにさせ、そのあとに教化を施す」といい、樊遲に對して、「自分の身を治めるものは、困難なことを先に行い、利益の享受を後にする」という。以上のことからすると、身の治め方と民の治め方は、行つ順序が異なる。『詩』に「飲ませ、食べさせ、教え、誨える」というのは、飲食を先にして、教誨を後にしており、人の治め方を言つたものである。さらに『詩』に「カンカンと音を立てて車輪を作る。君子は働かなければ食しない」というのは、仕事を先にして食事を後にしており、身の治め方を言つたものである。

『春秋』は為政者のあやまりをそしり、人民の苦しみをあわれむ。小さな悪は（自分以外のもの）に對しては指摘せず、自分に對しては書して非難する。そもそもこれは、仁で人を治め、義で我を治める。（『論語』の）「自分自身に對してはきびしく責め、他人はあまり深くは責めない」とは、このことをいう。なおかつ『論語』にすでに次のように見えるにもかかわらず、人は気がついていない。「君子は自分の過失を責めて、人の悪を責めない」と。人の悪を責めないということは、仁が寛大であるということではないだろうか。自分の悪を責めるといふことは、義が完全であるということではないだろうか。これは仁は人にむかつてゆくことであり、義は我にむかつて来るということをいっているのであつて、どうして異なるのか。だから自分で自分の悪を指摘することを「情」といい、人の悪を指摘することを「賊」といい、自分に要求することを「厚」といい、人に要求することを「薄」という。自分を責めて身に備えることを「明」といい、人を責めて身に備えさせることを「惑」という。だから自分を治める節度で人を治めることは、上の位に治りながら寛容ではないということである。他人を治める節度で自分の身を治

めることは、礼を行っても尊愛されないということである。礼を行っても敬愛されなければ、徳行を傷つけて、民が（為政者を）尊ばなくなる。上の位におりながら寛容でなければ、人徳を傷つけて、民が（為政者に）親しまなくなる。親しまなければ信じられず、尊敬しなければ敬愛されない。二端（自治・治人）の政治が、為政者の考えに逆らい、間違った行いをすれば、人民に非難される。仁と義の關係は議論しなくてよいのだろうか。そもそも（自分の意志でものを）見ようとしなければ目にはなにも見えず、議論しなければ心はなにも得ることはできない。天下のうまい料理であつても、食べなければそのうまさはわからない。聖人の至道があつたとしても、議論しなければその意義はわからない。

祭義第七十六

宗廟の祭祀は一年に四度、春夏秋冬に実施される。それぞれ祠・禘・嘗・蒸といい、各季節に天が賜与した食物を供える。本篇前半は、その「祠」「禘」「嘗」「蒸」の名称の由来と、なぜその食物が供えられるかという理由が述べられる。後半は、祭祀の対象は、決して空虚なものではなく実在するのであるが、その存在を見ることができてはじめて天地鬼神のを知り、その後始めて「祭」の意味が明らかになると言う。また祭祀を執り行う君子の鬼神への接し方が述べられ、祭祀の重要性が明らかにされる。なお末尾の「其辭」以下の一節について蘇輿は、他篇の『春秋』を説いた文ではないかとする。確かに「祭義」の内容とは必ずしも結びつかず、錯簡の可能性が大きいと思われる。

五穀食物之性也、天之所以爲人賜也。宗廟上四時之所成、受賜而薦之宗廟、敬之（性）〔至〕①也、於祭之而宜矣。宗廟之祭、物之厚無上也。

春上豆實、夏上（尊）〔算〕②實、秋上柎實、冬上敦實。豆實、非也。春之所始生也。（尊）〔算〕③實、糶也。夏之所（受初）〔初受〕④也。柎實、黍也。秋之所先成也。敦實、稻也。冬之所畢熟也。始生故曰祠。善其司也。（夏約）〔初受〕⑤故曰禘。貴所（受初）〔初初〕⑥也。先成故曰嘗。嘗言甘也。畢熟故曰蒸。蒸言衆也。奉四時所受於天者而上之、爲上祭、貴天賜、且尊宗廟也。孔子受君賜則以祭。況受天賜乎。

一年之中、天賜四至、至則上之。此宗廟所以歲四祭也。故君子未嘗不食新。（新天賜至）〔天賜新至〕⑦、必先薦之、乃敢食之。尊天敬宗廟之心也。尊天、美義也。敬宗廟、大禮也。聖人之所謹也。不（欲）⑧多而欲潔清、不貪數而欲恭敬。

君子之祭也、躬親之。致其中心之誠、盡敬潔之道、以接至尊、故鬼享之。享之如此、乃可謂之能祭。祭者、察也。以善速鬼神之謂也。善乃速不可聞見者、故謂之察。吾以名之所享、故祭之不虛、安所〔可〕〔不〕⑨察哉。祭之爲言際也與。祭然後能見不見。見不見之見者、然後知天命鬼神。知天命鬼神、然後明祭之意。明祭之意、乃知重祭事。

孔子曰、吾不與祭、如不祭。祭神如神在。重祭事、如事生。故聖人於鬼神也、畏之而不敢欺也。信之而不獨任、事之而不專恃。恃其公、報有徳也。幸其不私、與人福也。其見於詩曰、嗟爾君子、毋恆安息、靜共爾位、好是正直、神之聽之、介爾景福。正直者得福也。不正者不得福、此其法也。以詩爲天下法矣。何謂不法哉。其辭直而重、有再歎之、欲人省其意也。而人尚不省、何其忘哉。孔子曰、書之重、辭之復。嗚呼不可不察也。其中必有美者焉、此之謂也。

【校記】

- ① 「性」 盧文弨に從い、「至」に改める。
② 「尊」 孫詒讓に從い、「算」に改める。

- ③ 「尊」 孫詒讓に従い、「算」に改める。
- ④ 「受初」 惠棟に従い、「初受」に改める。
- ⑤ 「夏約」 俞樾に従い、「初受」に改める。
- ⑥ 「受初」 宋本に従い、「初禱」に改める。
- ⑦ 「新天賜至」 董箋本(『校釋』引)が「天賜新至」に作り、盧文弨が「錢疑ふらくは是れ『天賜新至』ならん」と言い、『校釋』が「錢説是なり」と言うのに従い、「天賜新至」に改める。
- ⑧ 蘇輿が『多』の上、疑ふらくは一字を脱す」と言い、『校釋』が蘇説を是として文意の上から「欲」を補うのに従う。
- ⑨ 「可」 蘇輿が『可』、疑ふらくは『不』の誤りならん」と言うのに従い、「不」に改める。

【書き下し文】

祭義①第七十六

五穀食物の性(しやう)ずるや、天の人の爲(ため)に賜(たま)ふ所以(ゆゑ)なり。宗廟には四時の成す所を上(たてまつ)り、賜を受けて之を宗廟に薦(すす)むるは、敬の至りにして、之を祭るに於いて宜(よろ)しきなり。宗廟の祭には、物の厚(あつ)きは上(たてまつ)る無きなり。春は豆實(たてまつ)②を上(たてまつ)り、夏は算實(たてまつ)③を上(たてまつ)り、秋は枋實(たてまつ)④を上(たてまつ)り、冬は敦實(たてまつ)⑤を上(たてまつ)る。豆實は非(たが)なり⑥。春の始めて生む所なり。算實は麴(たが)なり。夏の初めて受くる所なり。枋實は黍(たが)なり。秋の先づ成す所なり。敦實は稻(たが)なり。冬の畢く熟する所なり。始めて生ずるが故に祠(たが)と曰(い)ふ⑦。其の司を善(よ)しとするなり。初めて受くるが故に禱(たが)と曰(い)ふ。初めて禱する所を貴(たが)ふなり。先づ成すが故に嘗(たが)と曰(い)ふ。嘗は甘きを言ふなり。畢く熟するが故に蒸(たが)と曰(い)ふ。蒸は衆(たが)きを言ふなり。四時に天より受くる所の者を奉(たが)じて之を上(たてまつ)り、上祭を爲(たが)すは、天賜を貴(たが)び且つ宗廟を尊(たが)ぶなり。孔子は君賜を受くれば則ち以て祭る⑧。況(たが)んや天賜を受くるをや。

一年の中、天賜は四たび至る。至れば則ち之を上(たてまつ)る。此れ宗廟には歳ごとくに四祭する所以(ゆゑ)なり。故に君子は未だ嘗(たが)て新しきを食せずんばあらざるなり⑨。天賜新たに至らば、必ず先づ之を薦(すす)め、乃ち敢へて之を食す。天を尊(たが)び宗廟を敬ふの心なり。天を尊(たが)ぶは、美義なり。宗廟を敬ふは大禮なり。聖人の謹(たが)む所なり。多きを欲せずして、潔清ならんと欲し、數を貪(たが)らずして恭敬ならんと欲す⑩。

君子の祭るや、之を躬(たが)親(たが)らす。其の中心の誠(まこと)を致(いた)し、敬潔の道を盡(つ)くして、以て至尊に接す、故に鬼(たが)⑪は之を享(たが)く。之を享(たが)くこと此の如(ごと)くにして⑫、乃ち之を能く祭ると謂(い)ふべし。祭とは祭なり⑬。善を以て鬼神に逮(たが)ぶの謂(い)なり。善は乃ち聞見すべからざる者(たが)⑭に逮(たが)ぶ、故に之を祭と謂(い)ふ。吾(われ)以て之(これ)が享(たが)くる所を名づく。故に之を祭りて虚ならず、安(いづ)れの所に祭(いた)らざらんや。祭の言(こと)たる際(とき)なるか⑮。祭りて然(しか)る後に能く見(み)れども見(み)えず。見(み)えざるの見(み)を見る者にして、然(しか)る後に天命鬼神を知る。天命鬼神を知りて、然(しか)る後に祭の意を明かにす。祭の意を明かにすれば、乃ち祭事を重んずるを知る。

孔子曰はく、「吾、祭りに與(たが)からざれば祭らざるが如し。神を祭るに神在(いま)すが如くす」⑯と。祭事を重んずること生(たが)に事(たが)ふるが如くす⑰。故に聖人の鬼神に於けるや、之を畏(おそ)れて敢(あやむ)へて欺(たが)かざるなり。之を信(たが)ずるも獨り任(たが)ぜず、之に事(たが)ふるも專(たが)らは持(たが)まず。其の公(たが)を恃(たが)みて有徳に報(たが)いるなり。其の私(たが)せざるを幸(たが)みて⑱人福に與(たが)かるなり。其の詩に見えて曰はく、「嗟(たが)爾(たが)君子、恆(たが)に安息する母(たが)かれ、爾(たが)の位を靜(たが)共(たが)し、是(たが)の正直を好(たが)せよ、神の之を聽(たが)けば、爾(たが)を介(たが)け福を景(たが)にせん」⑲。正直なる者は福を得るなり。正(たが)しからざる者は福を得ず、此れ其の法なり。詩を以て天下の法と爲(たが)す。何(たが)謂(い)れぞ⑳法らざる。其の辭(たが)直(たが)くして重(たが)ね、有(たが)た再び之を歎(たが)ずるは、人其の意(たが)を省(たが)みんことを欲すればなり。而(たが)るを人尚(たが)ほ省(たが)みざれば、何ぞ其れ忘(たが)なるか㉑。孔子曰はく、「書を之れ重(たが)ね、辭(たが)を之れ復(たが)す。嗚呼(たが)察(たが)せざるべからざるなり。其の中に必ず美なる者有(たが)り」㉒とは、此を之れ謂(い)ふなり。

【注】

① 『校釋』は『禮記』にも本篇と同名の「祭義篇」があることを指摘し、内容的に重なり合い補い合う関係であると言う。鄭玄の『目錄』には、名づけて祭義と曰ふは、其の祭祀・齋戒・薦羞の義を記すを以てなり。此れ別録に於いて祭祀に屬す。(名曰祭義者、以其記祭祀齋戒薦羞之義也。此於別録屬祭祀)

② 「豆」は、供え物を盛る木製の祭器。『爾雅』釋器に「木豆、之を豆と謂ふ」(木豆謂之豆)とあり、郭璞注に「豆は禮器なり」(豆禮器也)とある。桓公四年『公羊傳』に「一に曰はく乾豆」(一曰乾豆)とあり、その何休『解詁』に、

乾して之を豆し、宗廟に薦む。豆は祭器の名、状は鐙とうの如し。天子は二十有六、諸公は十有六、諸侯は十有二、卿上大夫は八、下大夫は六、士は二。(乾而豆之、(中)薦於宗廟。豆祭器名、状如鐙。天子二十有六、諸公十有六、諸侯十有二、卿上大夫八、下大夫六、士二)

とある。「天子は二十有六」以下は、尊卑の違いによる食膳の数の違いを表している。

凌曙は『三禮圖』に、

豆は高さ尺二寸、漆もて中を赤くし、大夫以上は赤雲の氣を畫き、諸侯は飾るに象を以てし、天子は玉飾を加ふ。(豆高尺二寸、漆赤中、大夫以上畫赤雲氣、諸侯飾以象、天子加玉飾)

とあるのを引く。これによれば、豆の高さは一尺二寸、内側が赤く塗られている。尊卑の違いによって飾りが異なる。

③ 「算」は竹製の祭器。「算」はもと「尊」に作るが、『校釋』は「尊」は酒器であつて食物を盛ることはできないと言ひ、孫詒讓が「尊」は「算」の訛であるとするのを是とする。孫詒讓は、『禮記』明堂位に「薦には玉豆、

雕簋てうきんを用ふ」とあり、その鄭玄注に、

簋は籩の屬なり。竹を以て之を爲る。(簋、籩屬也。以竹爲之)とあり、また『史記』汲鄭列伝に、

其の人に餽遺きくいするに、算器の食に過ぎず。(其餽遺人、不過算器食)

とあり、その『集解』に引く徐廣が「算は竹器なり」と言うのを引き、「簋」と「算」は古字通用すると言う。『校釋』は、「算」は「匱」に通じると言ひ、『儀禮』士冠禮の鄭玄注に「匱は竹器なり」とあるのを引き、古文の「匱」は「簋」に作り、「簋」はすなわち「算」であると言う。また『禮記』明堂位の疏に「簋、籩也」とあり、「算」は「籩」であると言う。

④ 「杓」は『説文』に「簋きは黍稷の方器なり」「杓も亦古の簋の字なり」とあり、きびを盛る方形の器。凌曙は『廣韻』に、

簋きは祭器なり、斗二升を受け、内は圓く外は方なるを簋と曰ふ。(簋簋、祭器、受斗二升、内圓外方、曰簋)

とあるのを引く。これによれば内側はまるく、外側は四角で一斗二升を入れる器。

また『考工記』疏に、

宗廟を祭るに木簋を用ふ。(祭宗廟用木簋)

とあるのを引く。

⑤ 「敦」について、凌曙は『三禮圖』に、

敦に足有り、其の形は今の酒樽法の如し。(敦有足、其形如今酒樽法)とあり、その聶崇義の注(宋『三禮圖集注』二十卷)に、

舊圖、敦は一斗二升を受け、漆もて中を赤くし、大夫は口を飾るに白金を以てす。(舊圖、敦受一斗二升、漆赤中、大夫飾口以白金)

とあるのを引き、また『孝經緯鈞命訣』に、

敦は規首にして、上下の圓相連ぬ。(敦、規首、上下圓相連)

とあるのを引く。これらによれば、口がまるく、円を積み重ねた球形の祭器で、内側が赤く塗られ、容量は一斗二升の器。

⑥ この「豆實は韭なり」以下、「冬の畢く熟する所なり」までは、各季節の祭祀に供える食物について述べているが、『禮記』王制篇に、

春には韭を薦め、夏には麥を薦め、秋には黍を薦め、冬には稻を薦む。
(春薦韭、夏薦麥、秋薦黍、冬薦稻)

とあり、また、『繁露』四祭篇に、

古は歳に四たび祭る。四たび祭るは四時の生熟する所に因りて、其の先祖父母を祭るなり。故に春は祠と曰ひ、夏は禘と曰ひ、秋は嘗と曰ひ、冬は蒸と曰ふ。此れ其の時を失はずして、以て先祖父母を奉祭するを言ふなり。時を過ぐるも祭らざれば、則ち人子爲るの道を失ふなり。祠は正月を以て始めて韭を食するなり。禘は四月を以て麥を食するなり。嘗は七月を以て黍稷を嘗するなり。蒸は十月を以て初稻を進むるなり。(古者歳四祭。四祭者因四時之所生(孰)(熟)、而祭其先祖父母也。故春曰祠、夏曰禘、秋曰嘗、冬曰蒸。此言不失其時、以奉祭先祖(父母)也。過時不祭、則失爲人子之道也。祠者以正月始食韭也。

禘者以四月食麥也。嘗者以七月嘗黍稷也。蒸者以十月進初稻也。)

とある。これにわれば正月に「韭」を食し、四月に「麥」を食し、七月に「黍稷」を嘗し、十月に「初稻」を進めるといふ。

⑦ この「始めて生ずるが故に祠と曰ふ」以下、「蒸は衆きを言ふなり」まで、は、四季の祭祀「祠」「禘」「嘗」「蒸」のそれぞれの意味を述べている。

ところで『禮記』王制篇には、

天子諸侯の宗廟の祭は、春を禘と曰ひ、夏を禘と曰ひ、秋を嘗と曰ひ、冬を烝と曰ふ。(天子諸侯宗廟之祭、春曰禘、夏曰禘、秋曰嘗、冬曰烝)とあり、四季の祭祀名をそれぞれ「禘」「禘」「嘗」「蒸」とし、本篇とは春と夏の祭名が異なる。これについて鄭玄は、

此れ蓋し夏殷の祭名なり。周は則ち之を改め、春に祠と曰ひ、夏に禘

と曰ひ、禘を以て殷祭と爲す。(此蓋夏殷之祭名。周則改之、春曰祠、

夏曰禘、以禘爲殷祭)

と云い、王制篇に見える祭名は夏殷の制であるという。また『繁露』深察名號第三十五にも、

祭の散名、春を祠と曰ひ、夏を禘と曰ひ、秋を嘗と曰ひ、冬を烝と曰ふ。(祭之散名、春曰祠、夏曰禘、秋曰嘗、冬曰烝)

と見える。

また、以下「祠」「禘」「嘗」「蒸」の意味について整理してみる。

蘇輿は、『繁露』四祭篇で『白虎通』宗廟篇に、

宗廟、歳に四たび祭る所以の者は何ぞや。春を祠と曰ふは、物微なり、故に祠もて之に名づく。夏を禘と曰ふは、麥熟し、之を進む。秋を嘗と曰ふは、新穀熟し、之を嘗す。冬を蒸と曰ふは、蒸の言たる衆なり。冬之物成る者衆し。(宗廟所以歳四祭者何。春曰祠者、物微、故祠名之。夏曰禘者、麥熟、進之。秋曰嘗者、新穀熟、嘗之。冬曰蒸者、蒸之爲言、衆也。冬之物成者衆)

とあるのを引く。

また、『春秋』桓公八年「春、正月、己卯、烝す」の条の『公羊傳』に、

烝とは何ぞ。冬の祭なり。春には祠と曰ひ、夏には禘と曰ひ、秋には嘗と曰ひ、冬には烝と曰ふ。(烝者何。冬祭也。春曰祠。夏曰禘。秋曰嘗。冬曰烝)

とあり、その何休『解詁』に、「祠」「禘」「嘗」「蒸」についてそれぞれ、

薦は韭・卵を尚ぶ。祠は猶ほ食のごときなり、猶ほ繼嗣のごときなり。春物始めて生ずれば、孝子親を思ひ、繼嗣して之を食ふ、故に祠と曰ふ。因りて以て死生を別つ。(薦尚韭卵。祠猶食也。猶繼嗣也。春物始生、孝子思親、繼嗣而食之。故曰祠。因以別死生)

薦は麥魚を尚ぶ。麥始めて熟して禘す可し、故に禘と曰ふ。(薦尚麥魚、麥始熟可禘、故曰禘)

薦は黍・朮を尚ぶ。嘗は先んずるの辭なり。秋、穀の成る者一に非ず、黍先づ熟し、薦むるを得可し。故に嘗と曰ふ。(薦尚黍朮。嘗者先

辭也。秋穀成者非一、黍先熟、可得薦。故曰嘗。

薦は稻鴈を尚ぶ。烝は衆なり、氣盛んな貌。冬、萬物畢ひたひたく成り、薦むる所衆多、芬芳備よぶさに具はる、故に蒸と曰ふ。(薦尚稻鴈。烝衆也、氣盛貌。冬萬物畢成、所薦衆多、芬芳備具、故曰烝)

とあり、それぞれの祭りの供物と意味とが述べられている。

本篇では、「祠」について「始めて生ずるが故に祠と曰ふ。其の司を善しとするなり」と言い、『白虎通』に「春を祠と曰ふは、物微なり、故に祠もて之に名づく」と言うが、本篇の「始めて生ずる」は『白虎通』の「物微」と同じであろう。本篇の「其の司を善しとするなり」は、よくわからないが、何休『解詁』に「祠は猶ほ食のごときなり、猶ほ繼嗣のごときなり。春物始めて生ずれば、孝子親を思ひ、繼嗣して之を食す、故に祠と曰ふ」とあり、「祠」を「食(やしなう)」「嗣(つぐ)」と解しており、本篇の「司(役目?)」は、あるいは「跡を継いで親を養うという役目」の意か。

「祔」は、本篇では「初めて受くるが故に祔と曰ふ。初めて祔する所を貴ぶなり」と言い、「初めて授かる」の意とする。『白虎通』では「夏を禴(「祔」と同じ)と曰ふは、麥熟し、之を進む」と言い、語義は明確にしている。何休『解詁』では、「麥始めて熟して祔す可し、故に祔と曰ふ」と言い、段玉裁(阮元『校勘記』引)が、「祔す可し」の「祔」は「洵(にる)」の誤りだとするのに従えば、「煮る」の意となる。陶鴻慶(『校釋』引)は、『爾雅』孫炎注(『太平御覽』卷二十一所収)に、

禴は薄なり。夏の時百穀未だ登みのらず。薦むべき者薄きなり。(禴、薄也。

夏時百穀未登、可薦者薄也)

とあるのを引き、「禴」を「約(はぶく)」の意とする。諸説あつて一考を要する。

「嘗」は本篇では「先づ成すが故に嘗と曰ふ。嘗は甘きを言ふなり」とあり、「先づ成す(最初に実る)」の意とするが、これは何休『解詁』の「嘗は先んずるの辭なり」と同意であろう。『白虎通』では「新穀熟し、之を嘗

す」と言い、あるいは「新」が「先づ成す(最初に実る)」の意を含むか。

「烝」は、本篇では「畢く熟するが故に蒸と曰ふ。蒸は衆おほきを言ふなり」と言い、『白虎通』は「冬を蒸と曰ふは、蒸の言たる衆なり。冬の物成る者衆し」と言い、何休『解詁』は「烝は衆なり、氣盛んな貌。冬、萬物畢く成り、薦むる所衆多、芬芳備よぶさに具はる、故に蒸と曰ふ」と言い、三者ともに「烝」を「衆(おおい)」の意とし、「冬は万物がごとごとく成熟するため供え物が多い」の意とする。

また『説文』に、

春の祭を祠と曰ひ、品物少なく、文辭多きなり。示に従ひ、司の聲。(春祭曰祠、品物少、多文辭也。従示司聲)

とある。また『校釋』は『爾雅』釋天に、

春の祭を祠と曰ひ、夏の祭を祔と曰ひ、秋の祭を嘗と曰ひ、冬の祭を蒸と曰ふ。(春祭曰祠、夏祭曰祔、秋祭曰嘗、冬祭曰蒸)

とあり、その郭璞注に、

祠の言たる食なり。新菜洵にるべし。新穀を嘗す。品物を進むるなり。(祠之言食。新菜可洵。嘗新穀。進品物也)

とあるのを引くが、『白虎通』、何休『解詁』と同じ。

⑧ 『論語』郷党篇に、

君、食を賜へば、必ず席を正しくして先づ之を嘗む。君、脛を賜へば、必ず熟して之を薦む。君、生けるを賜へば、必ず之を畜かふ。君に侍食するに、君祭れば先づ飯す。(君賜食、必正席先嘗之。君賜脛、必熟而薦之。君賜生、必畜之。侍食於君、君祭先飯)

とあり、何晏『集解』に引く孔安国が「其の先祖に薦む」と言う。

⑨ 『禮記』少儀篇の「嘗」の祭りについて述べた一節に、

未だ嘗て新しきを食せずんばあらざるなり。(未嘗不食新)

とあり、その鄭玄注に、

嘗とは新物を寢廟に薦むるを謂ふ。(嘗謂薦新物於寢廟)

とある。

⑩ 『禮記』祭義篇に、

祭は數するを欲せず、數するときは則ち煩はし、煩はしきときは則ち敬せず。(祭不欲數、數則煩、煩則不敬)

とあり、祭りはたびたび行うべきではないと言う。たびたび行うと煩わしくなり、そのため敬虔な気持ち薄れるからだという。

また『禮記』曲禮上篇に、

禱祠祭祀、鬼神に供給するは、禮に非ざれば誠ならずおそかならず。君子は恭敬擯節退讓して以て禮を明らかにす。(禱祠祭祀、供給鬼神、非禮不誠不莊。是以君子恭敬擯節退讓以明禮)

とあり、礼は万事の根本であり、お祭りに供え物をするにも礼がなければまごころも尽くされず威儀も厳かではないという。その疏に、

何胤云ふ、貌に在りては恭と爲し、心に在りては敬と爲す。(何胤云、在貌爲恭、在心爲敬)

とあり、これによれば、顔の表情には「恭」、心には「敬」と言うという。

⑪ 冒廣生(『校釋』引)は、「鬼」の下に「神」の字が有るべきだという。あるいはそれが正しいか。

⑫ 陶鴻慶(『校釋』引)は、「故鬼享之。享之如此、乃可謂之能祭」で、「享之」という語が重出していることに対して意味がないとし、前後の文で「天」と「鬼」とを並挙していることから「故鬼享之。天子之。如此乃可謂之能祭」の誤りではないかとする。伝写される間に「天」が欠落し、「予」を「享」としてしまったのではないかという。一説としておく。『校釋』は陶鴻慶の説を「未だ確かならず」と言う。

⑬ 「祭」について、凌曙は『尚書大傳』周伝(『太平御覽』卷五二四引)に、祭の言たる、祭なり。祭とは至るなり。至るとは人事なり。人事至りて然る後に祭る。(祭之爲言祭也。祭者至也。至者人事至也。人事至然後祭)(『太平御覽』卷五二四引)

とあるのを引く。これによれば「祭」は「察」で、「察」は「至る」の意。また『校釋』は『廣雅』釋詁に「祭は至なり」とあるのを引く。そこまで「至る」ことによって通常は見えない鬼神を「察みる」ことができるというのであろう。

⑭ 「不可聞見者」とは、『校釋』は「鬼神」を指すという。今従う。

⑮ 『校釋』は『廣雅』釋言に「祭は際なり」とあるのを引き、「人と鬼神との交際」の意とする。『今註今譯』も「交際」の意とする。今従う。

⑯ 『論語』八佾篇に、
子曰はく、吾、祭に與あからざれば、祭らざるが如し。(子曰、吾不與祭、如不祭)

とあり、『集解』に、

包曰はく、孔子或いは出で或いは病みて、自親みづから祭らず、攝者をして之を爲さしめ、肅敬を心に致さざるは、祭らざると同じきなり。(包曰孔子或出或病、而不自親祭、使攝者爲之、不致肅敬於心、與不祭同)

とある。これによれば「外出あるいは病気で、直接祭りに参与せず代理の者にお祭りさせたときは、敬いの気持ちを致すことができず、それはお祭しなかつたのと同じである」の意。

⑰ 『校釋』は『禮記』中庸に、

死に事ふること生に事ふるが如くし、亡に事ふること存に事ふるが如くするは、孝の至りなり。(事死如事生、事亡如事存、孝之至也)

とあり、また『禮記』祭義に、

君子は生けるときは則ち敬養し、死するときは則ち敬享す。終身辱めざらんことを思へばなり。(君子生則敬養、死則敬享。思終身弗辱也)

とあるのを引く。

陶鴻慶は「重祭事如事生」は「事死如事生」に作るべきだと言い、『校釋』は「重祭死如事生」に作るのが義として優れていると言うが、ここでは一応このままにしておく。

⑱ 陶鴻慶は「幸」は「信」の誤りだという。『校釋』は、『韻圃』（『華嚴經音義』引）に「幸は頼なり」とあるのを引き、字を改める必要はないと言う。今そのままにしておく。

⑲ 『詩』小雅「小明」第五章に見える。同第四章に、

嗟爾君子 恒に安處する無かれ 爾の位を靖共し 正直はれ與せよ
神の之を聴けば 穀を式て女に以へん（嗟爾君子 無恒安處 靖共爾位 正直是與 神之聽之 式穀以女）

とある。「君子」とは、『鄭箋』に「其の友の未だ仕へざる者を謂ふなり」とあり、「朋友のまだ仕えていない者」の意。「恒」は、『鄭箋』に「常なり」と言う。「息」は、『毛伝』に「猶ほ處のごときなり」とあり、「処」の意。「靜」は阮元本では「靖」に作る。『集伝』に「靖」は『靜』と同じと言う。『毛伝』に「靖は謀なり」とあり、「謀る」の意。「好」は『鄭箋』に「猶ほ與のごときなり」とあり、「与する」の意。「正直」は『毛伝』に「正直を正と爲す。能く人の曲を正すと曰ふ」とあり、「正しくまっすぐの者」の意。「介」「景」は『毛伝』はどちらも「大なり」とし、『鄭箋』は「介」は「助なり」という。従って「介爾景福」は、『毛伝』では「爾の景福を介にせん」と読み、『鄭箋』では「爾を介け福を景にせん」と読む。ここでは一応『鄭箋』の読みに従っておく。

⑳ 蘇輿は「謂」と「爲」は同じ意とする。今従う。

㉑ 「忘」は『校釋』は失誤の意とする。楊樹達（『校釋』引）は、「忘」は「妄」ではないかという。今、一応「誤ったこと」と訳しておく。

㉒ 僖公四年「楚の屈完來りて師に盟はんとす。召陵に盟ふ」の『公羊傳』に、

屈完とは何ぞ。楚の大夫なり。何を以て使と稱せざる。屈完を尊べはなり。曷爲れぞ屈完を尊ぶ。桓公に當たるを以てなり。其の師に盟はんとす。召陵に盟ふと言ふは何ぞ。師、召陵に在ればなり。師、召陵に在れば、則ち曷爲れぞ再び盟ふと言ふ。楚を服するを喜べばなり。（屈

完者何。楚大夫也。何以不稱使。尊屈完也。曷爲尊屈完。以當桓公也。其言盟于師、盟于召陵何。師在召陵也。師在召陵、則曷爲再言盟。喜服楚也）

とあり、その何休『解詁』に、

孔子曰はく、書を之れ重ね、辭を之れ復す。嗚呼察せざるべからざるなり。其の中に必ず美なる者有り。（孔子曰、書之重、辭之復、嗚呼、不可不察、其中必有美者焉）

とある。『解詁』に引く孔子の言葉は、本篇に引く孔子の言葉と（「也」の一字を除いて）同じである。疏は「春秋說の文なり」と言う。凌曙は「孔子曰く美者焉」は「春秋緯に見ゆ」と言う。

蘇輿は「其辭」以下、他篇の『春秋』を解説した文ではないかとし、『春秋』に見える「書之重」「辭之復」（盧文弨は「辭之復」の「復」は「復」と同じと言う）の例として以下の条を指摘している。

「書之重」の例

僖公五年經に、

・公及齊侯・宋公・陳侯・衛侯・鄭伯・許男・曹伯會王世子于首戴。

・秋八月、諸侯盟于首戴。

とあり、「首戴」（蘇輿は「首止」と言うが、『左傳』の經文は「首止」、『公羊傳』『穀梁傳』の經文は「首戴」）での「盟」が重ねて書かれている。

以下同様に、僖公九年經の「葵丘」での「盟」。

・夏、公會宰周公・齊侯・宋子・衛侯・鄭伯・許男・曹伯于葵丘。

・九月戊辰、諸侯盟于葵丘。

また、僖公四年經の「召陵」での「盟」。

・楚屈完來盟于師、盟于召陵。

「辭之復」の例

桓公二年經に、

・三月、公會齊侯・陳侯・鄭伯于稷、以成宋亂。
とあり、最初に「稷」での「会」が書かれ、「成宋亂」で締めくくつてい
る。

襄公三十年経に、

・晋人・齊人・宋人・衛人・鄭人・曹人・莒人・邾婁人・滕人・薛人
・杞人・小邾婁人會于澶淵。宋災故。

とあり、最初に「澶淵」での「会」が書かれ、「宋災故」で締めくくつて
いる。

昭公二十三年経に、

・尹氏立王子朝

と書かれているが、これに先んじて昭公二十二年経に、

・王室亂

と書かれている。

以上が蘇輿が例として指摘している条であるが、ここに挙げられている例
からすると、蘇輿の理解する「辭之復」は、一事を二つに(複数に)分けて
書くことを意味するようだ。本稿では、一応「同じ言葉を繰り返す」と訳
したが、一考を要する。

【現代語訳】

五穀食物が生じるのは、天が人のために賜与するからである。宗廟には春
夏秋冬それぞれに実った食物をお供えするが、(天から)賜物を受けて、それ
を宗廟にたてまつるのは、敬意の極みであり、宗廟の祭において義になつ
ている。宗廟の祭には、物を手厚くたてまつることはない。

春は豆に盛った供え物をたてまつり、夏は算に盛った供え物をたてまつり、
秋は籩ひに盛った供え物をたてまつり、冬は敦とんに盛った供え物をたてまつる。

豆に盛った供え物とは非たである。(それは)春に最初に生じるものである。算

に盛った供え物とはいりむぎである。(それは)夏に最初に(天から)さずかるもの
である。籩ひに盛った供え物とは黍きびである。(それは)秋に最初に実るものであ
る。敦とんに盛った供え物とは稻いねである。(それは)冬に完全に成熟するものであ
る。最初に生じるものであることから(春の祭を)祠いと言う。その役目をよし
とするのである。最初に(天から)さずかるものであることから(夏の祭を)禘ひ
と言う。最初にさずかったものを尊ぶのである。最初に実るものであること
から(秋の祭を)嘗うまと言う。「嘗」は甘いことを意味する。成熟し終わるもので
あることから(冬の祭を)蒸おと言う。「蒸」は衆おほいことを意味する。(春夏秋冬
の)四時に天からさずかったものをうけてお供えし、祭りを行うのは、天から
の賜物を尊び、かつ宗廟を尊ぶのである。孔子は君から賜物を戴くと(それを)
祭った。まして天から賜物を戴いた場合はなおさらである。

一年の中、天の賜物は四度やってくる。やってくるのとそれをお供えする。
これが宗廟には歳ごとに四度祭る理由である。だから君子今までに(最初の)
新しい賜物を食たべなかつたことはないのである。天からの賜物が新たにやっ
てくると、必ず最初にそれを神にお供えし、そこで強つよいてそれを食たべる。(そ
れが)天を尊び宗廟を敬うやむ心である。天を尊ぶのは、美しい道義である。宗廟
を敬うやむのは重大な儀礼である。聖人が謹つつしんで実行することである。(供え物
は)多くを求めず、潔きよ清よらかであることを求め、頻しばしば繁しばしばに(お供え)することはせ
ず、恭敬の気持ちを大切にす。

君子が祭る場合は自ら執り行う。内にある誠の心を尽くし、敬潔の道を尽
くして、この上なく尊い神に接しようとするから、鬼はこれを享うやめてくれる。
このように鬼がこれを享うやめてくれたとき、そこで、このことを「祭ることが
できた」と言うことができる。「祭」とは「察さつ(いたる)」の意味である。善よで
あることで鬼神にいたるといふ意味である。善よというのはまことに見聞する
ことのできないものにいたるのであり、それ故にこれを「察」と言う。私は
この享うやめてくれる存在を名づけている。それ故に空虚なものをお祭りするの
ではなく、(善よは)どこにいたらないことがあるか。「祭」という言葉は「際

（交わり）」の意味であろうか。祭りに與^{あつ}かりて、その後、よく見ようとするが見えない。見えないが（確かに）そこに存在するものを見ることのできる者が、はじめて、天命鬼神のことを知る。天命鬼神のことを知って、はじめて祭の意味を明かにする。祭の意味を明かにすれば、やっとそこで祭事を重視することを知る。

孔子が言う、「私は、祭りに参加しなければ祭らなかつたような気がする。神を祭る場合は神がそこに存在するかのように行う」と。生きている人にお仕えするのと同じように祭事を重んじる。だから聖人の鬼神に対する態度は、畏れうやまつて決して欺^{あざむ}かないのである。信用するがまかせきりにせず、お仕えするが頼りつきりにしない。その公平をたのんで有徳者に恩返しをする。その自分勝手をしないことをたのんで人としての福にあずかるのである。その詩に次のように見える、「ああ汝君子よ 常にそこに安居してはならない 汝の身分を思慮して恭しくし 正直な者に与せよ 神明はそれを聴いて 汝を助け大いに幸福にしてくれよう」と。正直者が福を得て、不正をはたらく者は福を得ないというのは、世の理法である。『詩』を天下の法とみなす。どうして法^{のう}らな^いであらうか。

その言葉は正直で重複し、再度感嘆することがあるのは、人がその意味を省察することを願うからである。それなのに人がなお省察しなければ、（それは）何と誤ったことではないか。孔子が言う、「同じことを重ねて書き、同じ言葉を繰り返す。ああ察しなければならぬ。その中に必ず立派なことが書いてある」とは、このことを言うのである。